

梵文法華經信解品偈頌について

小 島 文 保

梵文法華經、偈頌のもつ重要性については、申すまでもないことである。今ここで取上げる信解品偈頌も、序品、壽量品、神力名、常不輕品等の偈頌と同様、全頌が Triṣṭubh 調と Jagatī 調とよりなるもので、法華經偈頌の中でポピュラーな存在であらう。

先づ初めにその韻律について、次にガータ、プラクリットがネポール本、西域本でどのような形で現われているか、そうして終りに譯語について考察して見よう。

信解品偈頌の韻律については、荻原、土田本、梵文法華經、序27頁に指摘してあるやうに總數62頌、全頌が Triṣṭubh 調となつている。即ち1節が11綴字よりなる Imḍravajrā, Upendravajrā, Upajāti, そうして1節が12綴字よりなる詩韻のもの、Jagatī の Imḍravamṇa, Vamṇasthavila がそれである。以下にこれらを表示して見よう。數字は偈頌の番號、括弧内の a, b, c, d, は順次に第1句、第2句、第3句、第4句を示す。

1 節が11綴字よりなる詩韻のもの

I. Imḍravajrā (ta, ta, ja, ga, ga) (5, 6)

(—V— VV—V—)

1(a, b) 4(c, d) 7(d) 9(a, b) 11(a, c, d) 12(a, b) 13(b) 14(b) 15(c, d) 16(a, d)
17(a, b) 18(a, b, d) 22(b) 23(b, c) 24(c, d) 27(a, c) 28(b) 29(c, d) 31(d) 32(c)
33(a, b, c) 34(a) 35(d) 36(a, b, c) 37(a, b, d) 39(a, b) 40(b) 42(a, b, c, d)
45(a, b) 46(a, b, c, d) 48(c, d) 50(d) 51(c, d) 52(c, d) 53(a, b, c, d) 54(a, b,
c, d) 55(a, b) 57(a, d) 58(d) 61(a, b, c, d)

II. Upendravajrā (ja, ta, ja, ga, ga) (5, 6)

(V—V— VV—V—)

2(a, b, d) 3(a, b) 4(a, b) 5(a, b, c) 8(d) 9(c, d) 10(c) 12(d) 15(b) 17(d) 19(b)
20(c) 21(c) 23(d) 25(d) 30(c, d) 31(c) 36(c) 38(c) 41(c, d) 43(d) 48(a, b)
49(a, b) 51(a) 52(a, b) 55(c, d)

III. Upajāti

1(c, d) 3(c, d) 6(a, b, c, d) 7(a, b) 13(c, d) 14(c, d) 21(a, b) 22(c, d) 24(a, b)
 25(a, b) 26(a, b, c, d) 28(c, d) 29(a, b) 30(a, b) 31(a, b) 31(a, b) 32(a, b)
 34(c, d) 35(a, b) 38(a, b) 39(c, d) 40(c, d) 41(a, b) 43(c, d) 44(a, b, c, d)
 47(a, b, c, d) 49(c, d) 50(a, b) 56(a, b) 58(a, b) 60(a, b)

1 節が12綴字よりなる詩韻のもの

I Imdravamçā (ta, ta, ja, ra) (5, 7)

(—V— VV—V—V—)

8(b) 10(b, d) 13(a) 14(a) 15(a) 20(b) 21(d) 23(a) 27(b, d) 32(d) 35(c) 37(c)
 38(d) 40(a) 43(a)

II Vamçasthavila (ja, ta, ja, ra) (5, 7)

(V—V— VV—V—V—)

7(c) 8(a) 12(c) 16(c) 18(c) 19(c, d) 20(d) 28(a) 33(d) 50(c) 57(c) 58(c) 59
 (b, c)

ところでこれ以外に1節が13綴字よりなる詩韻のもの、即ち、Atijagatī の
 Mañjubhāṣiṇī 調 (sa, ja, sa, ja, ga) (6, 7) (VV—V—V VV—V—V—)
 がある。17(c) 19(a) 25(c) 45(c) 46(d) 57(b) である。

この詩韻は序品の 72(d) 74(a), 99(a) にも見られるものである。

次に Rucirā 調 (ja, bha, sa, ja, ga) (4, 9)

(V—V— VVVV—V—V—)

が 11(b) 16(b) に見られる。

敍上これら13綴字の詩韻はこの品のもつ特色であらうと思われる。

次にガータ、プラクリットがネポール本、西域本の上でどのような現象を見せて
 いるか考察してみよう。

先づネポール本信解品偈頌の代名詞變化を見ると20偈、24偈に *ayu* (男, 單,
 主) があるが、これはガータ、プラクリットであり、オリジナル、サンスクリッ
 トは *ayam* である。(cf. F. Edgerton: Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and
 Dictionary, vol. 1. 118 p. 21. 79)

同じ現象が22偈には *imu* (男, 單, 業) とあり、これもオリジナル、サンスク
 リットは *imam* である。又31偈に *ahu* (mat の單, 主) とあり、これはオリジ
 ナル、サンスクリットは *aham* であり、尙16偈に *etu* (etat の單, 業) とあり、
 これはオリジナル、サンスクリットは *etam* である。

以上4つの例はオリジナル、サンスクリットの代名詞の語尾 *am* が *u* という

ブラクリットの變化を見せていることが分る。これら現象については岩本裕、坂本幸男、譯著、法華經、上、(岩波本)、解題 418 頁にも、岩本氏が指摘されているところであり、ネポール本、各品に見られる特色である。

ところが他方、カダリック本、法師功德品を見ると、オリヂナル、サンスクリットの *imam* (*idam* の男、單、業) が *ida* (中、單、業) (本田本, No. 170, l. 2: No. 183, l. 5, l. 7) となつている。又ファルフアード、ベグ本、見寶塔品を見るとオリヂナル、サンスクリット *imam* が *idam* (本田本, No. 72, l. 4—5: No. 73, l. 2) となつている。従つて敍上の西域本(カダソック本、ファルフアードベグ本)はオリヂナル、サンスクリットの代名詞、男性を中性として轉用していることが分る。

これらを表示すると次のやうである。

Original Skt.→Nepal 本	kha 本←F 本
imam(男)→imu(男)	ida(中)←idam(中)

次にネポール本信解品偈頌の動詞變化を見ると、〔I〕Causative stem の *aya* が *e* となつている。即ち *gaṇenti* (15 偈) *bhāventi* (39 偈) *dameti* (48 偈) *darseti* (61 偈) がそれである。〔II〕Optative の現在、三人稱、單數の *et* が *i* となつている。即ち *saṃśodhayi* (23 偈) *bhartsayi* (27 偈) *kārāpayi* (28 偈) *viśrambhayī* (28 偈) がそれである。〔III〕*bhū* の現在語基は *bho* となる。即ち *bhoti* (42 偈) (43 偈) (46 偈), *bhonti* (46 偈) がそれである。以上がネポール本偈頌動詞の特色である。これに對して西域本では〔I〕Causative stem の *aya* は *e* となり、ネポール本と同様である。即ち *deçenti* (59 偈) ペトロフスキー本 (cf. 眞田有美: ペトロフスキー本, 法華經梵本の研究, 147 頁) 〔II〕希求相(現在, 三人稱, 單數)の *et* はネポール本と異なり、カダリック本では、壽量品 *cintayet* (本田本, No. 61, 4. l) *vadet* (同本, No. 61, 8. l) *ārocayed* (同本, No. 62, 6. l) 分別功德品 *dhārayet* (同本 No. 136, 4. l) 又法師品 *cintayet* (眞田有美: 法華經梵本の研究—168 頁) などに見られるやうに、オリヂナル、サンスクリットそのままである。〔III〕*bhū* の現在語基は *bho* となるのは〔ava→o の現象〕ネポール本と同様である。即ちカダリック本、隨喜功德品 *bhoti* (本田本, No. 157. 5. l: No. 158, 7. l), 法師功德品 *bhoti* (同本, No. 163, 5. l), 法師功德品 *bhoti* (同本, No. 165, 5. l), 常不輕品 *bhonti* (同本 No. 198, 2. l) 等々に見られるところのものである。

以上梵文法華經信解品偈頌のもつ特色を代名詞と動詞とに限つて探求したが、Lalitavistara や Mahāvastu などに見られる言語現象とも合せ考究して行けば一層法華經偈頌の特色が見出されることであらう。

終りに梵文法華經信解品偈頌，理解の上で必要缺くべからざる資料として，漢譯を無視することは出来ない。従つてここに漢譯，特に羅什譯と梵本とを比較して，梵文當相に見られない現象の二，三を指摘し，梵文解釋の上に役立てることにしよう。

先づ第1偈，後半に見える「當得成佛」の譯語は梵文には見られぬやうである。即ち

sahasāiva asmābhir ayam tathādyā monojñaghoṣaḥ ṅrutu nāyakasya (南條，ケルン本，110p. 13. 1)

忽然として我等は今日指導者の心よい教えを聞いた

とある。勿論「當得成佛」の譯語例はこの品の第37偈，第39偈に見られ，即ち第37偈後半に bhavye buddhāḥ 第39偈の後半には bhaviṣyathā buddha とある。しかし敍上の第1偈後半にはこれらの言葉は見出せない。然るに漢譯は明かに「當得成佛」の譯語を表現している。

思うにこの「當得成佛」は法華經に於ける授記思想と關係を持つものと云えよう。譬喩品，舍利弗の「當得作佛」の段には

Api khalu punaḥ Śāriputra bhaviṣyasi tvam anāgate 'dhvany aprameyaiḥ kalpair acintyair apramānair bahūnām tathāgata koṭi nayuta śata sahasrāṇām saddharmam dhārayitvā vīvidhām ca pūjām kṛtvēmām eva bodhisattva caryām paripūrya Padmaprabho nāma tathāgato 'rhan samyak sambuddho loka bhaviṣyasi vidyā caraṇa saṃpannaḥ sugato loka cid anuttaraḥ puruṣa dāmya sārathīḥ śastā devāṇām ca manuṣyāṇām ca buddho bhagavān.

(南條，ケルン本，65 p. 13—7)

舍利弗，汝於未來世，過無量無邊，不可思議劫供養若干千萬億佛，奉持正法，具足菩薩所行之道，當得作佛，號曰華光如來，應供正偏知，明行足，善逝，世間解，無上士，調御大夫，天人師，佛，世尊 (大正，9.11. b)

とあり，この舍利弗を初めとして，五百弟子授記品の富樓那彌多羅尼子，と以下の弟子，受學無學人記品の羅睺羅，と以下の弟子，又提婆達多品の提婆，及び龍女への授記，さらに勸持品に於て波闍比丘尼及び六千の學無學比丘，耶輸比丘尼，等々に對して各々記別を授けている。これを天台大師は法華文句，第四（大正 34.

(78)

梵文法華經信解品偈頌について(小島)

226. a—227c)の中、上根、中根、下根に對し、即ち三周說法を聞いて得悟した三根の聲聞(弟子)に對して各々作佛の記を授けている。三周とは勿論、法說周、譬說周、因緣周である。しかも法說周に於ては上根に對して授記し、譬喩品に於て舍利弗に授記があり、譬喩周に於ては中根に對して授記し、授記品に摩訶迦葉、須菩提、迦旃延、目犍連の四大聲聞に授記があり、又因緣周に於ては、下根に對して授記し、五百弟子授記品に於て、初め富樓那に、次に總じて千二百の聲聞に、次に別して憍陳如、次に優樓頻螺迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉、迦留陀夷、優陀夷、阿菴樓陀、離婆多、劫賓那、薄拘羅、周陀、莎伽陀、等々の五百人に授記し、授學無學品に於て阿難、羅睺羅及び學無學の二千人に授記の、尙、提婆、勸持の兩品は前述の如き授記がなされているのである。ところでここに注目したいのは女人成佛についてである。女人成佛を分けると、出家者は佛の姨母の Mahāprajāpati (摩訶波闍波提)、即ち釋尊を育てた方と、釋尊の皇太子時代の妃であつた Yaçodharā (耶輸陀羅)比丘尼の二人、在家者は龍女と凡夫女人(藥王品)との二人である。この最後の名もなき凡夫女人の成佛が特記さるべきものであらう。というのは階級性の強い印度で、しかも女人の地位の低いところで、このやうに一般の女子の成佛が決定されたことは特筆すべきことであらう。即ち

sacet punar Nakṣatrarājasamkusmitābhijñā mātṛgrāma imam dharma-paryāyam śrutvōdgrahīṣyati dhārayīṣyati tasya sa eva paścimaḥ strī-bhāvo bhaviṣyati. Yaḥ kaś-cin Nakṣatrarājasamkusmitābhijñānam Bhaiṣajyarājā-pūrva-yoga-parivartam paścimāyām pañcāśatyām śrutvā mātṛgrāmaḥ pratipatryate sa khalv atas'cyutaḥ Sukhāvatyām lokadhātāv upapatsyate. yasyām sa bhagavān Amitāyus tathāgato 'rhan samyaksambuddho bodhisattva-gaṇa parivṛtas tiṣṭhati dhriyate yāpayati.

(南條、ケルン本、418 p. 9. l—419 p. 4. l)

若有人聞是藥王菩薩本事品者、亦得無量無邊功德、若有女人、聞是藥王菩薩本事來品、能受持者、盡是女身、後不復受、若如來滅後五百歲中、若有女人、聞是經典、如說修行、於此命終、即往安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處 (大正(9.54. b—c))

に見られるところである。

尙この外、阿闍貴王女阿術達菩薩經(西晋、竺法護譯、一卷)(大正 12.83, c—89. b)に見える阿術達、離垢施女經(西晋、竺法護譯、一卷)(大正 12.89, b—107, a)の離垢施、須摩提菩薩經(姚秦、鳩摩羅什譯、一卷)(大正 12.78, c—81, c)の須摩提、又、海龍王經、第三、女寶錦受決品(西晋、竺法護譯、四卷)(大正 15. 149, b—150, c)の寶錦の成佛、菩薩處胎經第七、八、賢聖齊品の龍女の阿彌陀佛國に

生じ作佛する等々女人作佛の實例が見られるのである。以上の「當得作佛」の bhaviṣyasi は今日中に發生すべき事實、又將來に於て早晚發生すべき事實を敍する二人稱の第一未來である。すると釋尊が弟子等に授記作佛されたこれらの事實は、成佛の可能性を示したものであり、換言すると、授記が即ち作佛であるという法華經の成佛觀ともいえよう。

次に第6偈に家の財物を列擧している中に、dhānyam (穀物) は、梵文、チベット文共に見えているが、漢譯にはない。しかし漢譯の輩輿は梵文にない。

次に第25偈後半

upasaṅkramet tasya narasya antike avabhartsyanto na karotha karma

(南條, ケルン本, 114 p. 6. l)

その人の傍に近づいて、仕事をしていないと非難する(拙譯)

を羅ひは「往到子所, 方便附近, 語令動作」(大正 9.18. a) と譯し, 法護又「則便往詣, 到其子所, 勅之促起, 修所當爲」(大正 9.82, a) と翻譯して、漢譯當面には na (チベット mi) の表現を見せていない如き觀がある。しかしこの偈文の意味を、漢譯は第27偈を譯す際に、第25偈後半を考慮して、うまく譯している。即ち「如是苦言 汝當動作」(大正 9.18. a) とあつて、單純に子供を甘やかしているのではない父の情をよく表はしている。第27偈前半

evaṃ ca taṃ bhartsyi tasmī kāle saṃśleṣayettam punareva paṇḍitaḥ.

(南條, ケルン本, 114 p. 9. l)

そのときにかく彼に注意して、後に賢人は彼をなぐさめ(拙譯)

とある。

従つて梵文和譯の際にも、この配慮がなされなければならぬであらう。

次に第26偈の後半に saloṇabhaktaṃ ca dadāmi tubhyam (南條, ケルン本, 114 p. 8. l)

鹽のはいつた食物を 汝にあたえよう

又 çakam çāḍim ca punar dadāmi

(南條, ケルン本, 114 p. 8. l)

そして野菜と衣服を與えよう

とあるのを、漢譯は「飲食充足, 薦席厚暖」と譯している。これは中國人に分るやうに譯したものであらうか。それにしても衣服と薦席とは少し違ふやうである。

次に第31偈後半に

niryātayīṣyābhy ahu sarvam artham

(南條, ケルン本, 115 p. 4 l)

私は一切所有物を與えんと思つて

(80) 梵文法華經信解品偈頌について (小 島)

とあるが、漢譯はこのところでは譯をせず、それを第34偈に結語しているやうである。即ち

etarya niryātayi sarva açoṣataḥ (南條, ケルン本, 115 p. 9. 1)

このものに一切のものをあたえる

「その用うる所を恣にすべし」 (大正, 9. 18. a)

がそれである。

最後に第62偈の後半

bahuprakāraṁ hi bravītidharmam nidarçayanto imam agrabodhim

(南條, ケルン本, 120 p. 8 1)

「最高のさとりを示しつつ、種々に教を語る」とあり、法護が「以法示現 此尊佛道」(大正, 9. 83. a) と譯しているところと一致する。之に反し羅什が「於一乘道隨宣說三」(大正 9. 19. a) と譯しているのは、これが意譯をしたものである。ここに三乗の意味を明かに出したことは、梵文解釋の上に注意を促す點で有効であるがこの限界をこえて、かの方便品十如是の如き域に達すると、かえつて本文を正しく伝える點にいささか疑問が生ずるものといえようか。

(昭和37年度文部省科學研究費による綜合研究の分擔研究)